説教20201115テモテ二3:1-9 　讃美歌　67 508 509

「真理に逆らって」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

　今日の聖書箇所は、様々な罪のありさまを列挙して示していて、またそれが今の世の中でその通りに実現してしまっているという読んでいて悲しくなる箇所です。しかし、私たちはこの箇所から目をそらすことはできません。聖書の最後に、この書物からは何かを取り去ることも、そして何かを付け加えることも許されないと記されていますのはそういうことだと思います。

　それにしましても、今日のような悪に言及している箇所を、信仰なしに軽く読んでしまいますならば、私たちは簡単に、その悪に侵されてしまうことでしょう。それゆえ私たちは聖霊なる神の満たしとご支配を終始祈りつつ、今日のみ言葉に聞いてまいりたいと願います。

　今日の聖書箇所は先週の箇所と密接にかかわっています。そして、その両者を接続しているのは、しかし、という接続詞です。先週の聖書箇所を少し振返ってみますと、私たちは、真理の言葉、すなわちキリストの出来事を確信して、光の源がキリストであり、決して私たち自身ではないことを確信するとき、私たちは余裕をもって柔和で、優しくキリストを述べ伝えることが出来るようにされる、ということでした。相手に合わせて、金や銀の器のたとえを用いてわかりやすく述べ伝えられるということでした。しかし、きょうの聖書箇所では、そんな悠長なことも言っていられない状況、時期がやってきたことが記されています。すなわちそれは終わりの時であります。この終わりの時がいつを指し示しているのか、それは究極的には、後の後、最後の時、キリストの再臨、新しいエルサレムがやってくるときのことです。又、その先駆けとなるような時代のことも言い含めているでしょう。すなわち、ある時代が終わりを告げ、そのあとの時期がやってこようとしているときのことです。死の影の谷を歩む道がやがて峠に近づき、その峠の向こうに伸びるまだ見ぬ後の世界のこと思い描いているときのことを言っています。具体的に言えば、第二次世界大戦が終わろうとしているとき、私たちは、まだ見ぬ後の世の中に入れられる前に、非常に困難な時期に遭遇をいたしました。

　又、今という時も、今日の聖書箇所で言う困難な時期に当てはまるかもしれません。何か一つの時代が終わろうとしていますが、その後にある世界がどのようなところであるのか、それを多くの人が希望をもって思い描けないでいる、困難な時期が今でありましょう。

　このような困難な時期は歴史的に見て必ずまたやってきます。困難な時期には、先週の聖書箇所でのように、柔和に優しくキリストを述べ伝えることもできなくされるでしょう。５節に記されていますように、時には人々を避けて、距離を置くことも必要になってくるでしょう。しかしこのような困難な時期にもキリストは当然働いておられます。このような死の影の谷を行くような暗さの中でこそ、キリストの救いの光が燦然と輝いているではないかといえる人は幸いです。でも、今周りを見渡してみても、キリストの光が世の中で燦然と輝いているとまでは言えないようです。それはなぜなのかを考えてみますに、やはり終わりの時には、また悪の勢力もその勢いを増すからではないでしょうか。

　さて、悪の勢力に私たちが巻き込まれるとき、悪は悪の顔をして近づいてくるのでしょうか。それならば私たちは、簡単に悪を見分けて、その悪から遠ざかることが出来るでしょう。しかし、問題は悪が善人の顔をして近づいてくるときです。あるいは悪が善と思い込んで近づいてくるときです。多くの場合、私たちは悪いことを、悪いことと思わずしてしまっているものです。ですから問題はそう簡単ではないのです。今日ではモラハラといったことの実態も広く知られるようになりました。ひょっとしたら、今日の聖書箇所で記されている諸悪のありさまよりも、今の悪のありさまのほうが深刻化しているのではないでしょうか。

しかし、時代は変わり、諸悪のありさまが移り変わったとしても、その根本は変わりません。悪というのは短くわかりやすく言えば、私たちを真理の言葉、すなわちキリストの出来事から引き離そうとして働く力のことです。光の源であるキリストから私たちを遠ざけようとする力のことです。その悪の力と対抗できるのは、言うまでもなくキリストの真理しかないのです。そしてその真理に逆らうこと、すなわち悪なのです。

　その悪の力が勢いを増し、深刻化していることを念頭に置きながら、その悪のありさまを歴史にさかのぼってみてまいりましょう。

　今日の招きの言葉で、出エジプト記の7章8節から１１節が読まれました。これは出エジプト記の有名な１０の災いの冒頭に当たりますが、イスラエル人をエジプトから去らせようとしてエジプトに１０の災いを仕掛けた主なる神に対して、エジプトの魔術師たちが向こうを張って対抗してきた様が記されています。再度お読みします。「主はモーセとアロンに言われた。「もし、ファラオがあなたたちに向かって、『奇跡を行ってみよ』と求めるならば、あなたはアロンに、『杖を取って、ファラオの前に投げよ』と言うと、杖は蛇になる。」モーセとアロンはファラオのもとに行き、主の命じられたとおりに行った。アロンが自分の杖をファラオとその家臣たちの前に投げると、杖は蛇になった。そこでファラオも賢者や呪術師を召し出した。エジプトの魔術師もまた、秘術を用いて同じことを行った。」

その結果、エジプト王ファラオの心はかたくなになり、あくまでも、主なる神ではなくて、手勢の魔術師たちのほうを信用し続け、ついに１０の災いがもたらされ、ついにはエジプトの国のすべての初子が打たれて死ぬという事態に至ったのでした。エジプトにしてみれば最悪の事態です。そして今日の聖書箇所にヤンネとヤンブレというそのエジプトの魔術師の実名が記されています。

　ファラオはなぜ魔術師のほうを信用し続けたのでしょうか。それはその時が一つの終わりの時だったからでありましょう。あるいは表現を変えれば、ファラオのかたくなさが一つの時代の終わりを招いたともいえるかもしれません。そして終わりの時に、主なる神とエジプトの魔術師とは、いわばガチンコの対決をしたのです。しかし聖書に書いてある通り、真理に逆らったヤンネとヤンブレは信仰の失格者となり、それ以上はびこることはなく、彼らの無知は、すべての人々にあらわにされたのでした。

　それにしても、ファラオは魔術師達に魅入られていました。終わりの時には、何か悪魔的なものに救いを求めて、それに魅入られてどんどんと深みにはまっていってしまうことがあるということを私たちは実際に知っています。

　このような成り行きはいつの時代でも起こりうることなのです。では今の時代の魔術について、主を恐れつつ慎重に語ってまいりたいと思います。

　先週私は、たまたまある芥川賞作家のフィクションの近未来小説『ｒ帝国』を読んでいまして、なるほどと思わされる言葉に出会いました。それはいかにもワルの政治家がはく次のようなセリフです。「人々が欲しいのは、真実ではなく半径５メートルの幸福なのだ」というものです。このワルの政治家によれば、この事実を利用すれば、人々は利己的に自分たちだけの幸福を追い求めて争うようになり、それを利用して自分は幸福になる、といった悪い発想です。しかし、一般的には、この事実は、普通次のようにオブラートに包んで言い表されます。「私たちが欲しいのは、こんな世の中でも自分たちの小さな幸せを深めていくことだ」という風にいわれれば、当然私たちは彼らを励ましたくなるに違いありません。そのように愛を深めて結婚される方々もおられることでしょう。しかし同時に私たちは、この彼らの小さな幸せが、結果的に自分たちだけの半径5メートル内の幸福になってしまわないように願わずにはおられません。

キリストの教会はずっと、結婚を大切にし、教会では結婚式が執り行われます。どれくらい大切にしているかといいますと、例えばカトリック教会では、結婚は、洗礼と聖餐に並ぶサクラメントの一つに数えられています。プロテスタント教会におきましては、結婚はサクラメントではなくなりましたが、それでも、それを大切にしていることに変わりはありません。

　先週、たまたま私の東京神学大学での恩師である関川やすひろ先生の説教を聞いていました。先生はドイツの著名な神学者ボンフェッファ－のことを語られました。彼は第二次世界大戦中にナチスによって投獄され、獄死するのですが、獄中から、結婚したメイにあてて次のように、結婚生活に向けてのアドバイスをしたためました。「結婚には二つの側面があります。一つ目は、神と隣人から祝福を受けて歩むこと。二つ目は結婚によって生じる荷物を二人で積極的に担っていくこと。その営みによってキリストの愛を表していくこと。」とボンフェッファ－は新婚のメイたちにアドバイスをいたしました。このアドバイスはボンフェッファ－だから言えたというたぐいのことではなく、普通の牧師が皆さん普通に述べることです。有名な聖書箇所を引けば、「あなた方は、地の塩である。・・・そのようにあなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなた方のよい行いを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい」という聖句を皆さん結婚式で耳にしたことがあおりになることでしょう。

　この聖句を味わうとき、キリストの教会がどのように結婚を大切にしているかがわかってくると思います。主イエスは、決して、結婚が男女二人の愛で完結することであるとは言われません。男女二人の愛はひたすら、世の人が神の愛に入れられるために営まれるべきであると主イエスは言われます。なぜなら、すべての人が救われるのは、男女の愛によってではなく、私たちの罪の為に我が子イエスを差し出された父なる神の限りない愛によってこそ、私たちは救われるものだからです。このことが先週から語っている真理の言葉の中身です。

　今一度この終わりの時に思いをいたしましょう。悪の力は最後の力を振り絞って私たちに対抗してまいります。それは男女の愛という甘美な装いをまとって近づいてくることもままあるでしょう。しかし男女の愛というのはそれだけで完結できるものではありません。男女の愛は、本来、神の愛によって導かれ、支えられ、そして人々を神の愛へと招いていくための営みであります。そのためには、夫婦は、例えば子育てなどの神から与えられた仕事を忠実に果たしていかねばなりません。でも、その仕事は本来、夫婦だけで完結して行われることでもないのです。私たちは、終わりの時にあたって、以上のような主の真理の道を見分けられますよう、一人一人の信仰が増し加えられますよう、主なる神に祈ってまいりましょう。

お祈りいたします

天の父なる神様、この主日に私たち兄弟姉妹を招かれ、共にみ言葉に聞き、あなたを礼拝賛美できますことに感謝いたします。

私たちは、今この困難な世の中を歩まされています。恐れが多くある中に在って、私たちがあなたの真理を固く信じ、あなたらいただく平和の内を歩んでいくことが出来ますように。

ことに、私たちを引き裂こうとする、巧みな悪の力を見抜いて、私たちが悪しきことを避けることが出来ますように。

教会共同体の歩みは、私たちの個人的な幸福にとどまることではなく、場所と時間を超えて広がっていくものです。それを成し遂げてくださるあなたからの愛を、私たち一人一人が確信し、御心を行っていくことが出来ますように。

教会に来られないでいる多くの方々、ユーチューブで視聴されています方々一人一人のうえにも、あなたの恵みが等しく注がれますように。

今、困難な状況、苦しみの中にある方々を、あなたがその場にいて救ってくださいますように。

父と聖霊と共に一体であって代々に生き支配されています私たちの救い主イエスキリストのみ名によって祈り願います。